

南瓜の育種について

吉村邦敏・大田譲一・幾竹正実

(熊本県八代農経試) (熊農試)

YOSHIMURA, K., Ota, J. and IKUTAKE, M.

Studies on the Breeding of Squash, Higokurokawaizu

育成目的昭和30年に熊本農試が肥後早生1号、2号を育成したが、この肥後早生南瓜より更に、着果性が安定し、食味よく、中果で市場性が高く、低温時の生育旺盛で、早生多収性の半促成用の黒皮南瓜の育成をつづけ1~2の優良系を見出したので報告する。

育成経過及び試験結果、昭和30年に中型会津X黒皮早生(第1図)を交配して、

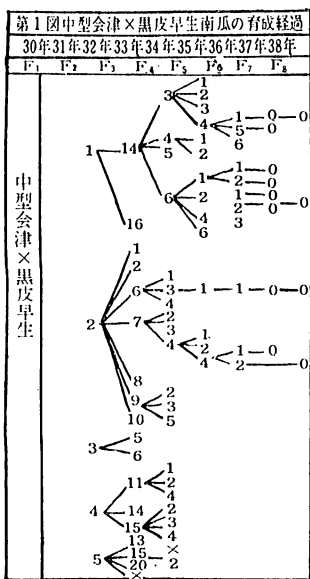
数系統を選抜し、以後、昭和34年まで低温で短日の早熟栽培と高温で長日の抑制栽培で雌花着生状態や、生育程度等の生態並びに、各系統の収量、食味について検討し、優良と思われる1-14-3, 1-14-6, 2-6-3, 2-7-4等の系統を選抜した。昭和35年より、これらの系統を産地の水田裏作で、半促成栽培と早熟栽培で検討した結果(第1表)より、1-14-6-1は草勢が強く低温伸長性もよい。

1-14-6-1-1は着果が良好で安定しており、1-14-6-1-2は草勢が強い。果は腰高で肩が張り、果揃いもよく、大きさは中~大果で黒皮型である。

1-14-6-2は、1-14-6-1と同様に草勢が強く、低温伸長性もあり、その他の形質も大差はない。1-14-6-2-1は大果で着果性が安定している。1-14-6-2-2は、草勢は弱く、着果も少く、稍々小型である。

1-14-6系の内では1-14-6-2-1が、草勢は強く、着果性は安定し、果型は腰高で肩が張り、果の揃いも良好で、果の大きさも程よく、肉質も優れている。

1-14-3-4は、草勢は、1-14-6系に劣り、果はやや小型ではあるが、肉質、果型、果揃いはよく、1-14-3-4-1は特に着果性が優れている。



第1表 育成系南瓜F7の特性調査表

S 36.12.20播

系統名	変種名	第二雌花開花日 月 日	着花節位	全節数	草 丈 cm	雌花数	収穫始	一果平均重 g	一株着花数	10 a 当個数	収穫重量 kg
1-14-6-1-1	P	4. 1	12.0	59.8	356.8	5.0	4.27	779	5.9	5,310	4,136
	C	3. 31			299.0	4.5					
	P	3. 30			61.8	4.3					
1-14-6-1-2	P	4. 8	14.5	58.5	427.0	4.3	4.30	864	5.3	4,770	4,121
	C	3. 27			63.8	5.8					
	P	4. 13			62.8	5.3					
1-14-6-2-1	P	3. 29	12.5	62.8	355.4	5.3	4.25	821	6.2	5,580	4,581
	C	3. 29			57.6	4.6					
	P	3. 29			50.2	4.2					
1-14-6-2-2	P	3. 27	11.0	57.6	345.2	4.6	4.25	728	5.1	4,590	3,342
	C	3. 29			50.2	4.2					
	P	3. 27			60.8	5.4					
1-14-3-4-1	P	4. 10	12.8	60.8	355.4	5.4	4.17	759	6.4	5,760	4,372
	C	4. 10			49.4	5.2					
	P	3. 27			63.4	5.8					
1-14-3-4-5	P	4. 10	11.4	53.6	329.8	7.0	4.25	834	5.3	4,770	3,978
	C	4. 10			63.4	5.8					
	P	3. 27			63.4	5.8					
2-7-4-4-1	P	3. 30	11.5	65.0	353.0	3.5	4.25	673	5.5	4,950	3,331
	C	4. 2			54.3	4.3					
	P	3. 27			59.5	4.3					
2-7-4-4-2	P	4. 8	12.2	50.5	375.0	3.8	4.25	668	5.5	4,950	3,307
	C	3. 29			64.7	4.8					
	P	4. 15			51.0	4.3					
2-6-3-1-1	P	4. 15	13.0	51.0	344.3	4.3	4.25	877	4.4	3,960	3,473
	C	4. 15			51.0	4.3					
	P	4. 15			51.0	4.3					

2-7-4-4は、草勢は弱く、特に低温時の初期生育は極めて悪いが、温度が高くなれば蔓の伸長は旺盛となる。着果性は安定しているが、果は扁平になり、小果で不揃いである。然し、生育の中期以後は蔓の伸長は旺盛となり、果も大果になり果型は整い肉質も優れた良果を産する。

2-6-3-1-1は、育成系の中では最も草勢が強く、大果で果型、果揃いは良好であるが、着果性と食味が劣る。

以上の結果より、系統内では多少の変異はみられるが大きな分離はみられず、実用的には固定したと思われる、更に、食味、果型、収量、低温伸長性からも半促成用品種として優良と思われ、特に、1-14-3と、1-14-6が優れている。

育成系の特性

低温時の生育は良好で草勢は強い。雌花着生節位は低く、着果性は安定している。開花してより、収穫までの日数は初期の4月一杯までは23~25日間位を要するが、5月以降になれば20日間位で収穫される。果は菊座型をなし、1果平均重が800g程度の大きさで、

果は黒緑色を呈する。品質は第2表の通りで粘質強く、甘味多くて食味佳良である。

第2表 育成系南瓜分析表
熊本県工業試験場 S37.6.9

種別		2-7-4-4	1-14-3-1	1-4-6-2	肥後早生
水分	%	82.4	84.0	84.4	88.8
	型物中	17.6	16.0	15.6	11.2
全糖	%	59.25	62.42	59.41	54.68
	溶性糖	6.70	9.49	8.81	15.01
水エーテル抽出物	%	3.63	3.50	4.33	6.20
	抽出物	47.30	47.67	45.54	35.70
灰分	%	4.36	4.20	5.15	4.47
	順位	2 (3)	1 (1)	3 (2)	4 (4)

